



荒廃していく農地も復活させ、地域に根ざしたい思いがありました。



出産で畑に出られないときに始めたジャム作り。できることに取り組みようと思いました。



また、義母は活動的で、「子どもがいても、やりたいことやれる女性でいてね」、と常に応援してくれました。長男が1歳になる前、東京のフランス菓子の学校に通うことも、「子どもが小学校とへ行ったら、自由が



夫と話します。「プロに任せよう」そして助けてもらい、こちらも助ける、この関係が大切

国際ソブチミスト長野一みず様より、男女共同参画推進のため、ベビーチェアを寄贈していただきました。

発行：長野市人権・男女共同参画課
協力：長野市男女共同参画センター
〒380-0814 長野市大字鶴賀緑町1614番地
TEL：026-224-5428
Eメール：jinken-danjo@city.nagano.lg.jp
HP：http://www.city.nagano.nagano.jp

●取材を終えて
とてもさわやかな笑顔でお話してくださった竹内さん。農園経営に当たり、家族や地域の方々と助け合い、絆を大切にしている様子がうかがえました。人への感謝の気持ち、人と人をつなげる、そんなことを感じさせられた取材でした。（丁）

そんな時です。ワイナリーの方に、農業志望の話をしたら畑を貸してくれる人を紹介してくれました。家庭菜園とは違い、広い畑で草刈りなどとても大変でした。でも、地元の方が、草刈りを手伝ってくれたり、余った苗をくれたり、周囲の人に助けてもらい、また一歩自分の思いに近づいた気がしました。

しかし、大変な思いをして作ってもそれに見合うお金にならないことも実感しました。

夫と話し合う日々

私たちは長野に来てから結婚をしました。夫とどう農業を進めていくかを毎日のように議論していました。そのような中、夫が法人の新事業で、荒廃地の開拓から一連で取り組むプロジェクトスタッフとなりました。夫はそこに携わる中で、自分の生まれ育った地元長野市も同じ問題を抱えていることを知り、次第に地元で地域に根差し

家族、そして義母のことに支えられ

結婚して、夫の実家に入り、とても歓迎され、長男が生まれた時も祖父母が助けてくれました。土地を提供してくれた地域の方々とともに、夫の両親のおかげで恵まれたスタートができました。

これから進みたい道

旧来からある“型”ではなく、地域にも貢献でき、経営として成り立つ農業の姿を、夫とともに模索しながら続けてきました。ブドウも個人での販売で付加価値をつけるよりも、自分たちだけではなくスタッフを雇用し、そして荒廃地をなくして畑のある風景を守っていくということを、地域に根差してやっていきたいと思っています。

次世代の女性の皆さんへ

“抱え込まないこと。弱い自分をさらけ出すこと。できる人に任せること”
それが自分も、そして周りも輝けることにつながると思います。

かがやく明日のために

With You



Vol.78
編集：With You 編集委員

長野市男女共同参画情報紙「With You」は、男女共同参画社会づくりに向け、市民編集委員が取材・情報発信をしています。

今回は、農業分野。果樹園、その加工品やカフェと広く展開している女性「ラ・フルティエールタケウチ」竹内果樹園 竹内和恵さん取材しました。



地域に貢献できる農業を目指して そして自分も、周りもみんな輝いて

現在、農業を主な仕事としている女性が減少しているなか、これからは農業の発展や地域経済の活性化のためにも、生活者の視点や、多彩な能力を持つ女性の農業者が、力を発揮していくことが求められています。

そこで、学生時代、地元の農産物であふれる長野の食卓の豊かさに触れ、農業に興味関心を持ち、長野へ移住。夫との農業経営そして子育ても、自然体で活躍する女性を訪ねました。

「農ある暮らし」へのきっかけ、東京での就職、農業への思い

私は、埼玉で生まれ育って、農のある暮らしとは無縁で育ってきました。大学時代、夫となる彼の実家（長野市若穂）に来た時、自家製野菜やおやきなどが並ぶ食卓を見て、「豊かだな」と、心から「ホッとできる」感覚を覚え、農業に触れてみたいと感じたことが「農ある暮らし」へのきっかけです。

最初の就職は東京のアパレルでした。仕事に没頭しつつも家庭菜園を借りていました。

彼は東御市の農業法人に就職し、私も頻繁に通ううちに、「やっぱり、農業っていいよね」と思うようになりましたが、農業の現場を見ている彼からは、何度も「甘くはないよ」と言われ、まずは生活の基盤を作るために東御市のワイナリーに物販担当として就職しました。

周囲の人とのつながり

ワイナリーに就職してから事務仕事の日々が続く、同時に農業ができないもどかしさも感じていました。

でも、今ではそれがとても役立っています。途中でやめると別のところで同じ壁にぶつかると感じますね。



スタッフが一年を通して働くことのできる場をめざしたいです。